

春の苑その 紅くれなゐにほふ 桃の花

下照る道したでに 出で立つ少女をとめ

大伴家持おほとものやかもち 卷十九・四一三九

春の歌といえは、私
が思い出すのはこの
歌。大伴家持の有名な
一首です。この歌の題
詞には「天平勝宝二
(七五〇)年三月一日
の暮に」云々とあり
ます。この歌が詠まれ
たのは夕暮れ時だとい
うことは、案外知られ
ていないように思いま
す。春の夕暮れ時の庭
に、紅色の桃の花が照
り輝くほどに美しく咲
き、その桃の木の下

道には花の妖精のよう
な麗しい少女が立っ
ている。樹下美人図を思
わせる幻想的な情景の
歌で、家持の繊細な感
覚が発揮されている一
首だと思えます。
まだ大学院生だった
頃、授業で先生がこの
歌を取り上げました。
先生は、この歌の漢字
本文を見てみなさいと
言いました。この歌の
漢字本文は「春苑
紅尔保布 桃花 下

やまと
万葉がたり

照道尔 出立いであと嬌嬌せうせう」で
す。上三句の万葉仮名
にあたる文字を除く
と、「春苑紅桃花」
という五言の漢詩句の
ような表現になりま
す。すなわち、この歌
の背景には中国の漢詩
文の世界があるのだ、
と先生は言うのです。
大学院生とはいえ、漢
詩文はおろか、「万葉
集」についても全く無

知だった当時の私に
は、大変な驚きだった
ことを覚えています。
「万葉集」の背後には、
古代中国の文学とつな
がるような、とてつも
ない世界が広がってい
ることに、目のさめる
ような思いがしまし
た。急げ者だった私が、
【訳】春の苑に紅がてりはえる。桃の
花の輝く下の道に、立ち現れる少女。

生み出していきまし
た。この歌は越中時代
の作品ですので、漢詩
を意識してこの歌を詠
んだと考えることは十
分に可能です。ちなみ
に、2018年は大伴
家持生誕1300年の
記念の年にあたりま
す。「万葉集」を最後
に編さんしたといわれ
る家持に敬意を込め
て、今年の家持の歌を
たくさん勉強したいと
思います。(県立万葉
文化館研究員・大谷
歩) 〓原則、隔週掲載

春さらば

挿頭にせむと

わが思ひし

桜の花は 散りにけるかも

作者未詳(壮士)巻十六・三七八六

今日は春分の日。いよいよ春本番です。春といえは、やはり桜の話題は欠かせません。現代では、春のみならず日本を代表する花である桜。なぜ私たちが桜を美しいと思ひ、毎年花見をするのでしょうか。そのヒントが、「万葉集」のある作品に隠されています。『万葉集』には、次のような悲劇の伝説が伝えられています。昔、

桜児という女性をめぐって、二人の男(壮士)が命をかけて激しく争いました。もはや誰にも止められないその状況をいたく悲しんだ桜児は、男たちの争いを止めるために自ら命を絶ってしまいました。その男の一人が、彼女の死を悼んで詠んだという歌が今日の一首です。

やまと 万葉がたり

る桜花咲かば常にや恋ひむいや毎年(こゝろ)に(愛しい人の名にまつわる桜の花が咲いたならば、毎年、いつも恋しいと思ふことだろう)と詠まれています。男たちは、毎年咲く桜の花に桜児を重ねることで彼女の死を悼み、また彼女の形見として桜を愛でようと言っています。自分たちのせいで

死んでしまった女性に、向けて詠んだ歌として、何とも他人事のよいうな歌だという評価もあります。この歌のポイントはむしろそこにあります。この男たちの歌は、毎年桜を愛でる際に、伝説の中の男たちの立場に成り代わって、くり返したい継がれた歌であると私は考えています。おそらく、古代でも花を愛でる際には真が催されたと思われ、この古の桜児の悲劇の伝説は、桜を愛でる際に語られる定番の物語だったのだと

【訳】春になったら挿頭にしようと思っていた桜の花は、散ってしまったなあ。(※挿頭は古代の髪飾り)

思います。桜の花のように美しい桜児は、その名のとおりはかなく散ってしまった。その桜児への哀惜が、桜の花を愛でることの起源譚として人びとの間で語り伝えられ、「万葉集」に収録されるに至ったのだと思います。みなさんも、今年には桜児のことを想って、古に思いを馳せるお花見にはいかががでしょうか。(県立万葉文化館研究員・大谷歩)

|| 原則、隔週掲載